



三文オペラ 特別鑑賞会

昭和37年1月23日
会場 朝日講堂
主催 国立近代美術館
朝日新聞社

三文オペラ

Die Dreigroschenoper

独トビス・ワーナー映画1931年作

原作……………ジョン・ゲイ
脚色……………ベルト・ブレヒト
監督……………G・W・パブスト
撮影……………F・A・ワグナー
音楽……………クルト・ヴァイル

—キャスト—

メッキイ・メッサー……………ルドルフ・フォルスター
ポリイ……………カローラ・ネーヘル
ジュニイ……………ロッチ・レニア
ピーチャム……………フリッツ・ラスプ
その妻……………フェレスカ・ゲルト
警視総監ブラウン

……ラインホルト・シュンツェル
1932年2月25日邦楽座で封切

『三文オペラ』

清水 晶

『三文オペラ』という題名の映画は、日本に今まで二つ紹介されている。一つは、1931年にドイツでG・W・パブストによって作られたもので、原題もやはり『三文オペラ』『Dreigroschenoper』である。もう一つは、1953年にイギリスで、劇壇の新鋭ピーター・ブルック（最近、フランスで「雨のしのび逢い」を監督した）が、ロウレンス・オリビエを主演に作ったもので、この原題は“The Begger's Opera”だから、その通り訳せば「乞食オペラ」である。今ここで上映されるのは、前者の方だが、両者とも、女にもててもて仕方がない男前の泥棒が主人公になっていて、その名前も一方がメッキーなら、片方はマッキース、その恋女房がともにポリイで、乞食の親分の娘か、いかが

わしい古物商の娘、そのほか、時代は違いますが、ときの警視総監のような人物がどちらにも登場したりして、似ていると思えば結構似ているし、といて、違うといえはかなり違っている。それもその筈、この二つの映画の、そもそもの根源は、どちらもジョン・ゲイ（1685～1732）が1728年にロンドンで発表した「乞食オペラ」というオペラなのだが、これを後年、ドイツの劇作家ベルト・ブレヒト（1898～1956）が、第一次大戦のドイツの不況混乱のさなかの、1928年、大巾に書きかえ、『三文オペラ』とした。二つの映画の中、後者のイギリス映画は、ジョン・ゲイの原作の比較的忠実な映画化であるのに対し、今ここで上映されるドイツ映画の方はブレヒトの翻案によっている。いってみれば、この二つの映画は、同じジョン・ゲイを原作者としているが、その育ての母を異にする、いわば異母兄弟的な間柄なのである。

ジョン・ゲイの「乞食オペラ」は、オペラといっても本格的なものではなく、当時の流行歌をふんだんに取り入れた「俗謡オペラ」といわれるものであった。メロディーが親しみやすいものである上に、当時の貴族社会の腐敗を小気味よく諷刺した点が大喝采を博したということで、弱きを助け強きを挫く美男の俠盗マッキースをやんやともてはやす女たちの心そのまま当時の一般民衆の気持であったわけである。

ベルト・ブレヒトは、早くから資本主義社会に対する批判的、懐疑的な作家として、第1次大戦後のドイツ劇壇における、今日でいうヌーベル・バーグ的存在であったが、ジョン・ゲイの「乞食オペラ」を、場所と時代こそロンドンの19世紀末としたものの、実際は闇政治と社会不安に満ち満ちた第一次大戦後のドイツの世相を痛烈に諷刺したものに作りかえ、クルト・ワイルの、当時のヨーロッパとしては珍しいジャズ風の作曲と結びつけて、大きな話題を呼んだ。これを、ブレヒトと同じように急進的な映画監督として、すでに「喜びなき街」「西部戦線1918年」などで名声高いG

・W・パブスト（1895～）がさっそく映画化したものが、ここに上映される『三文オペラ』である。

わが国でも昭和7年2月に封切られ、ブレヒトの辛辣をきわめた人物設定と、パブストの半ば表現主義的な独特のスタイルと、ワイルの音楽の一種グロテスクなムードが三位一体となった傑作として、その年の「キネマ旬報」ベスト・テン第3位になったが、当時の内務省検閲によって警視総監のくだりを中心に、延20分ほどカットされ、公開の際はろくに筋の通らないものとなってしまった。今回、上映されるのは、ドイツのフィルム・ライブラリーから最近送られてきたもので、まったくノー・カットである。

1933年1月、ヒトラーの率いるナチスが政権を握ると、ワイルはユダヤ人であることから、彼の作曲の楽譜、レコードいっさいが没収され、この映画も勿論上映中止となり、ブレヒトはソビエトへ、パブストはフランスへと、それぞれ亡命することになって、この映画は、ドイツにおけるナチ前夜の文字通り最後の芸術的抵抗となった。

ブレヒトは、ソビエト、アメリカ、スイスと転々とした後、戦後東ドイツに帰り、自ら劇壇を組織するとともに、劇作ばかりでなく、詩、小説、論文と、多角的な活動を続け、1954年にはスターリン平和賞を受けたが、56年世界した。

パブストは、この『三文オペラ』のあと、すぐ傑作「炭坑」（「キネマ旬報」ベスト・テン第4位）、フランスでも「ドン・キホーテ」（同第6位）、「上から下まで」（同第8位）などの異色作を残したが、アメリカに渡ってからは意に満ちた作品がなく、戦時中オーストリアに帰って「喜劇役者」を監督した。戦後は「審判」「7月20日の出来事」「最後の幕」など、一連のナチ断末史ともいえるべき作品を発表、今や長老的存在となっている。